

教材としての厄災

—『竹取』・『うつほ』の事例を中心に—

中井 賢一
佐々 優香
山本 沙織

はじめに — コンセプト —

東日本大震災以降、国内では、防災・減災関連の研究や啓発が加速している。古典文学研究の立場からも、史実との比較をもとに様々な分析が進む^(注1)が、周知の通り、教育現場への十分なフィードバックには至っていない現状である。また、哲学や防災学の観点から、「厄災の教育学」の意義も言われる^(注2)が、諸学校の教科教育を前提とするものではなく、学習者に広く浸透させる方法としては、未だ不十分と言わざるを得ない。

本稿は、古典文学、就中、物語文学における天災・人災^(注3)あるいは、それらに準ずる災禍・騒動等、厄災^(注4)に纏わる叙述場面について、主に高等学校国語科の授業を想定した教材化案を提示するものである。向後も継続的な提案を予定しているが、本稿においては、『竹取物語』・『うつほ物語』に現れる当該場面を中心に取り上げ、い

ずれも国語科教育、防災・減災教育^(注5)、双方の観点から、それら場面の分析と共に、指導の一案を掲げるものとする。無論、授業は各学校の状況に応じて構成されるべきものであるうから、本稿での提示は、是非にも当該場面から学習者に読み取らせたい、あるいは、考えさせたい指導者からのメッセージ、いわば、授業の「核」の部分を中心に挙げる。本稿中、前後の授業展開や配分時間の例なども一部示すが、無論、学習者の現状や実態に即して、適宜、改められるべきものと考えている。

以下に、例えば、『竹取』でも『うつほ』でもないが、『大鏡』の一場面を挙げてみる^(注6)。

いま一つの御腹の大君は、冷泉院の女御にて、三条院、彈正の宮、帥宮の御母にて、三条院位につかせたまひしかば、贈皇后宮と申しき。この三人の宮たちを、祖父殿(兼家)ことのほかにかなしうし申したまひき。世の中に少しのことも出でき、雷も鳴り、地震もふる時は、まづ春宮(当時の「三条院」)の御方にまゐらせたまひて、舅の殿ばら、それならぬ人々などを、「内(帝である一条)の御方にははまぬれ。この(春宮である三条の)御方には我さぶらはむ」とぞ仰せられける。雲形といふ高名の御帯は、三条院にこそは奉らせたまへる、鉸具の裏に、「春

宮に奉る」と、刀のさきにて、自筆に書かせたまへるなり。(二四六―二四七頁)

【現代語訳】

内侍綏子とは別腹のご長女(超子)は、冷泉院の女御で、三条院、弾正の宮(為尊親王)、帥宮(敦道親王)の御母君でいらつしやり、三条院が即位されたので、追号し贈皇后宮と申し上げた。この三人の皇子たちを、祖父殿(兼家)は殊の外にかわいがり申し上げなされた。世間に何か少しでも変わったことが起こつたり、雷が鳴つたり、地震が起こつたりする時には、(兼家は)まず春宮(三条院)の御もとに参上なさつて、外舅にあたるご子息や、それ以外の方々などには、「お前たちは帝(一条帝)のもとに参上せよ。この春宮の御もとには私がそばにしよう」とおつしやつたことだ。雲形という名高い御石帯は、三条院に献上なさつたもので、その鈎具の裏には、「春宮に奉る」と、小刀の先で、祖父殿(兼家)の自筆でお書きなさつてあるとのことだ。

異変や雷、地震等の際、兼家は、まず時の春宮たる三条のもとに駆け付けるといふ。真つ先に駆け付けける先が、当代の帝一条でないことに注意したい。一条の

もとには「舅の殿ばら、それならぬ人々など」を派遣し、自らは優先的に春宮三条に近侍するのである。兼家の、三条と一条に対する遇し方の対照性については政治的見地からも議論されてきたところであるが(注8)、その当否はともかくとして、少なくとも結果的には、地震等に遭遇した際、兼家は、既に位に就いた現役の帝ではなく、未だ位に就かざる帝候補、即ち、より不安定な地位にある未来の帝たる春宮を、自らの手で優先的に守っていることにならう。『大鏡』には、物語上、厄災に際し、いわば、より立場の弱い者を自ら守ろうとする人間の姿が描き出されていると捉えて良いだらう(注9)。

無論、作中人物の思考や行動については、物語の展開やそれぞれの場面性、あるいは、人物相互の影響力や関係性などに左右されようが、それでも、厄災に臨み、当時の人間がいかにそれに対したかについては、一定私たちが当事者になつた際のモデルとなり得るのではないか。あるいは、それをもとに、では私たちはいかにあるべきか、熟考する素材となり得るのではないか。前に掲げた『大鏡』の一節は、「厄災に際し、より立場の弱い者を自ら守ろうとする人間の姿」について、学習者が様々に考えることを「核」とした授業へと十分に発展させ得ると思うのである(注10)。

一 『竹取』 — 大納言大伴御行の求婚から —

(大納言大伴御行は、かぐや姫から龍の首の玉を取つてくるよう指示され海に出たが、突然の嵐に遭い、一行は生命の危機にさらされる。…)

楫取答へて申す、「こころ船に乗りてまかり歩くに、まだかかるとわびしき目を見ず。…」と、楫取泣く。大納言、これを聞きて、のたまはく、「船に乗りては、楫取の申す事をこそ高き山と頼め、など、かくたのもしげなく申すぞ」と、青へとをつきてのたまふ。楫取答へて申す、「…風吹き、浪激しけれども、雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。疾風も、龍の吹かするなり。はや、神に祈りたまへ」といふ。「よきことなり」とて、「楫取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よごとをはなちて、立ち、居泣く泣く呼ばひたまふこと、千度ばかり申したまふ験にやあらむ、やうやう雷鳴りやみぬ。…(中略・大納言らは陸に打ち上げられ、一命を取り留める。)…大納言起きあて、のたまはく、「汝ら、よく持て来ずなりぬ。龍は鳴る雷の類にこそありけれ、それ

が玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとしけり。まして、龍を捕へたらましかば、また、こともなく我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。…」とて、家にすこし残りたりける物どもは、龍の玉取らぬ者どもに賜びつ。(四六〜四九頁) (注)

【現代語訳】

船頭が答えて申し上げるには、「長い間船に乗ってあちこち参りましたが、今までこんなにひどい目に遭つたことがあります。…」と、船頭は泣く。大納言は、これを聞いて、おっしゃるには、「船に乗るときは、船頭が申すことを、高き山のように揺るぎがないものとして頼みにするものなのに、どうして、このように頼りなく申すのか」と、青反吐を吐きながらおっしゃる。船頭が返事を申し上げるには、「…風が吹き、浪は激しいが、雷まで頭上に落ちかかるようなのは、龍を殺そうと探しているからなのです。はや、神にお祈りなさってください」と言う。大納言は、「それは良いことだ」とおっしゃって、「船頭がお祀りする神様、お聞きください。愚かにも、心幼く、龍を殺そうと思つたことでした。今後は、龍の毛一本さえも動かし申し上げるまい」と、寿詞を言

い放ち、立ったり、座ったり、泣きに泣きながら神様に呼びかけなされることを、千回ほど申し上げなされた効果であろうか、ようやく雷がやんだ。：（中略・大納言らは陸に打ち上げられ、一命を取り留める。）：大納言が起き上がって座って、おっしやるには、「お前たち、龍の玉をよくぞ持ってこなかった。龍は鳴り響く雷と同類であつたが、その玉を取ろうとして、多くの人々が被害にあうところだつた。まして、もし龍を捕まえたならば、また、容易に私は殺されたことだろう。よく捕まえずに済んだことだ。：」とおっしやって、家に少し残っていた財産などは、龍の玉を取らなかつた者たちにお与えになつた。

●指導例1

〔対象学年と指導時期〕

高校一年の六月頃

〔教材観〕

『竹取物語』は、現存最古の物語作品である。貴種流離譚等の話型に則つた、物語の伝統的スタイルが顕著であり、文学史的にも重要な位置を占める。後代の物語への影響が多大な代表的伝奇物語と言えよう。語源譚を介在させながら展開する求婚譚の進行に伴つて、人間世界の営みや人々の心情に、徐々に共感を示してい

くかぐや姫の心理変化は、『竹取』の主題に大きく関わる重要事項と言えるだろう。

かぐや姫求婚譚において、求婚者たちは様々な試練や苦難に直面することになるが、就中、大納言大伴御行が龍を捜索する際に遭遇する想定外の嵐は、本物語中の大きな厄災として捉えられよう。よつて、本指導においてはこのエピソードを取り上げることとする。なお、『竹取』は、学習者にとつて、多く幼少時から絵本等を通じて慣れ親しんでいると思われ、また、中学校の検定教科書にも掲載されていることから、いわば、最も心的ハードルの低い古典文学の一つと言えよう。導入期にあたる一年生の時期に本物語を取り扱うことは、適当であろうと思われる。なお、次項に触れる本指導の「核」の内容に鑑みても、高校生活を過ごす基本的姿勢の確立を図りたいこの時期での指導を第一案とするのが良いだろう。

〔指導観・指導過程の例〕

本場面、本エピソードを通じ、特に身分の上下に関わらず、専門的知識を有する人の意見に学ぶ謙虚さや、自らの非を速やかに認める率直さが、危険回避に繋がつた事実気付かせたい。知者・経験者の助言を真摯に受け入れることで困難の克服が成し得ること、また、そのためには知者・経験者の立場のいかんは問題ではな

いこと、等について、今後の高校生活の過ごし方をも
思い合わせつつ、学習者自身の身近な問題として具体
的に考えさせたい。それらを本指導の「核」と設定し、
厄災に対する大納言や楯取らの行動・心情を確認する
ことを通じ、自分はいかにあるべきか、考えを深めさ
せる時間とする。

「展開①」では、本場面における大納言と楯取の関係
性について理解させる。身分や立場に、明白に上下、あ
るいは優劣がある人間関係において、何らかの厄災に
遭遇した際に、上位者の考える対応策と下位者の考える
対応策が異なった時、上位者と下位者は、それぞれい
かに考え行動するか、今回は、身近な人間関係に置き
換えた上で、それぞれの視点から確認する方法をとる。
特に、下位者の方がより経験や専門的知識を有している
場合、下位者はそれを上位者に主張できるか、あるいは、
上位者はそれを素直に受け入れることができるか、
自分ならどうするかじっくりと考えさせたい。例えば、
ロールプレイ形式のグループワークを取り入れ、顧問
と部員、校長と生徒、先輩医師と後輩医師、師匠と弟子、
など様々な上下関係にある二人が何らかのトラブルに
遭遇し、且つ、下位者がそれなりに妥当な対応策を有
しているというシチュエーションを設定してみるのも
良いだろう。『竹取』本文の提示は、その後の方が効果

的であろうと思われる。

「展開②」では、本文部分の現代語訳の確認後、古文
本文を読ませ、その上で単語・助動詞・係り結びといっ
た重要事項を確認する。敢えて現代語訳を先に読ませ
ておくことで、短時間で物語内容の理解がより深まり
やすくなり、自身の考えを巡らせる余裕が担保される
と思われる。

「展開③」では、ワークシートを利用し、大納言、楯
取の心情や行動をまとめた上で、そのことから何が読
み取れるか、個人で考えさせる。特に、身分の上下に
関わらず、大納言が自らの目的遂行を抑え、経験や知
識を有する楯取の意見に耳を傾けることが、結果的に
危機の克服に繋がったことに気付かせ、その上で、そ
のような大納言の謙虚さや率直さの重要性について考
えさせるよう、授業を進めたい。

「展開④」では、個人のまとめをグループで発表し、
何が読み取れたか、意見交流をさせる。自分以外の他
者が、どのように本場面、本エピソードを理解したか、
多角的に知ること、自らの今後の行動の参考とさせ
たい。

「まとめ」では、本指導の「核」について、再確認、
問題提起しつつ、指導を閉じる。

《全一時での指導過程例》

・導入（授業内容の確認） Ⅱ 授業の手順等について確認する。（5分）

・展開①（グループでの活動Ⅰ） Ⅱ 前掲のようなロールプレイをもとに、上位者と下位者が何らかの厄災に遭遇した状況について、その対応策を中心に考えさせる。（10分）

・展開②（本文の読解と厄災の確認） Ⅱ 敢えて先に本文の現代語訳を配布し、古文本文と対照しつつ、現代語訳を確認する。その後、本場面における厄災と、「核」の理解に必要な文法事項や重要古語などについて確認する。（15分程度）

例・大納言、これを聞きて、のたまはく、「船に乗りては、楫取の申す事をこそ高き山と頼め、など、かくたのもしげなく申すぞ」と、

・楫取答へて申す、「…風吹き、浪激しけれども、雷さへ頂に落ちかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。疾風も、龍の吹かするなり。はや、神に祈りたまへ」といふ。

・「よきことなり」とて、「楫取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よごとをはなちて、立ち、居、泣

く泣く呼ばひたまふこと、千度ばかり申したまふ験に やあらむ、やうやう雷鳴りやみぬ。

・展開③（登場人物の対応の理解（個人での活動）） Ⅱ 厄災を契機とした登場人物の対応について、「大納言」・「楫取」それぞれの観点からまとめさせる。その上で、それらの事項から何が読み取れるか、個人で考えさせる。適宜、ワークシートを用いる。（10分程度）

例・「大納言」 Ⅱ 龍の首の玉が欲しいのにあきらめる。楫取を信用している。楫取の言うことに素直に従う。

・「楫取」 Ⅱ 身分が高い大納言に対しても臆することなく意見を言う。自分の経験から判断している。

・ ↓ 「困難にあつては、上下関係に関わらず、経験者や専門家の意見を受け入れること、また、妥当と思われる意見を提示することが大切であり、そのことで道が開けることがある。」

・展開④（登場人物の対応の理解（グループでの活動2）） Ⅱ 「展開③」の成果について、グループで意見交流をさせる。適宜、ワークシートを用いる。（5分程度）

・まとめ＝本指導の「核」について再確認する。(5分)

二 『うつつほ』 — 仲忠と母俊蔭女の生活から —

(母俊蔭女のため遠い山奥まで食料を求め歩く仲忠は、母を養うのに都合の良い住居を探そうとする。…)

かく遙かなるほどにし歩くも、苦しう覚えて、いかでこの山に、さるべきところもがな。近くて養はむ、と思ひて、山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木の四つ、物を合はせたるやうに立てるが、大きな屋のほどにあき合ひてあるを見て、この子の思ふやう、ここにわが親を据ゑたてまつりて、拾ひ出でむ木の実をも、まづまゐらせばや、と思ひて、寄りて見るに、いかめしき牝熊、牡熊、子生み連れて住むうつつほなりけり。出で走りて、この子(仲忠)を食まむとするとき、この子のいはく、「しばし待ちたまへ。まろが命断ちたまふな。まろは孝の子なり。親、はらからもなく、使ふ人もなくて、荒れたる家に、ただ一人住みて、まろがまゐるものにかかりたまへる母持ちたてまつれり。里にはすべき方もなければ、かかる山の木の实、葛の根を取りて、親にまゐるなり。高き山、深き谷を下り上り、まかり歩いて、朝にまかり出でて、暗うまかり帰るほど

だに、うしろめたう悲しくはべれば、かかる山の王住みたまふとも知らで、この木のうつつほに母を据ゑたてまつりて、芋一筋を掘り出でてもまずまゐらむ。また遠き道をも、親のためにとまかり歩けば、苦しうも覚えねど、つれづれと待ちたまふらむも悲しうはべれば、近く、と思ひたまへて、見はべりつるなり。されど、かく領じたまひけるところなれば、まかり去りぬ。空しくなりなば、親もいたづらになりたまひなむ。おのが身の中に、親を養はむに用なきところあらば、施したてまつるべし。足なくは、いづくにてか歩かむ。手なくは、何にてか木の实、葛の根をも掘らむ。口なくは、いづこよりか魂通はむ。腹、胸なくは、いづくにか心のあらむ。この中にいたづらなるところは、耳の端、鼻の峰なりけり。これを山の王に施したてまつる」と、涙を流していふときに、牝熊、牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として、親子のかなしさを知りて、二人の熊、子どもを引き連れて、この木のうつつほをこの子に譲りて、こと峰に移りぬ。(七六〜七八頁) (注10)

【現代語訳】

(仲忠は) このように遠くまで来て食物を求めるのも、つらく思われて、なんとかしてこの山に、住

めそうなどころがあつてほしい。どうせなら母上(倭蔭女)を近くに置いて養つてあげよう、と思つて、山深く入つて探して置くと、とても大きな杉の木が四本、物を合わせたように立っていて、それが大きな部屋ぐらいの広さの空洞になつてゐるのを見つけて、この子が思うには、ここに私の母上を住ませ申して、拾つて来た木の実をも、真つ先にさしあげたい、と思つて、大木に近寄つて見ると、そこは恐ろしそうな牝熊、牡熊が、子を育てながら住んでゐる木のうつつほであつた。熊が走り出て来て、今にもこの子を食い殺そうとしたとき、この子が言うには、「しばらくお待ちください。わたしの命を絶たないでください。わたしは孝行の子です。わたしは親や兄弟もなく、使用人もいなくて、荒れはてた家にただ一人住んで、わたしがさしあげる食物を頼りに生きておられる母を持ち上げています。里では生活すべき方法ありませんので、このような山の実や、葛の根をとつて、母にさしあげてゐるので、高い山や、深い谷を上つたり下りたりして、歩きまわつて、朝早く家を出て、夕方暗くなつて帰るその間でさえ、母のことが心配で悲しいものですから、このような山の王者がお住みになつてゐるとも知らないで、この木のうつつほに母を住ませ申して、

芋一本を掘り出してもすぐにさしあげようと思つたのです。またいくら遠い道でも、親のためにと歩きまわることは、苦しいとも思いませんが、その間所在なくわたしの帰りをお待ちになつてゐるであろう母を思うと悲しくございますので、やはり近くに住まわせたい、と思ひまして、このうつつほを見いだしたので、す。けれども、こうしてすでにお住みになつてゐるところです、わたしは帰ります。ここでわたしが命を落してしまつたら、きつと母も生きてはおられないでしょう。わたしの身体の中で、親を養うために必要でないところがあれば、それをさしあげましょう。もし足がなかつたら、どこに歩いて行かれましようか。もし手がなかつたら、どうやって木の実を拾ひ、葛の根を掘ることができましようか。もし口がなかつたら、どこから気持ちを伝えたらよいでしようか。もし腹や胸がなかつたら、どこに私の真心が宿るのでしようか。わたしの身体の中で不要なところは、耳たぶと、鼻の頭です。これを山の王者にさしあげます」と、涙を流して言つた時に、牝熊も牡熊も、荒々しい心をなくして、涙を落して、親子の情愛を悟つて、二匹の熊は、子熊たちを引き連れて、この木のうつつほをこの子に譲つて、他の山に移つて行つた。

●指導例2

「対象学年と指導時期」

高校二年生の九月初め頃

「教材観」

『うつほ物語』は、平安中期に成立したとされる最古の長編物語である。作者は未詳だが、源順説などがあり、『竹取』の伝奇的性格を顕著に受け継いでいる。俊蔭一族にかかる秘琴伝承譚と、正頼一族にかかるあて宮求婚譚から構成され、それらが密接に連動する形で物語が展開する。事実列挙の描写形態や、随時挿入される絵詞など、『うつほ』ならではの特徴的な叙述も多く含まれ、文学史上の意義は多大である。

それら展開中、就中、秘琴伝授に纏わる過程で、多く奇瑞や天変地異等が描かれるが、厄災を様々な困難や喪失の総称と捉えた時、秘琴伝授のキーパーソンである俊蔭との死別や、その後の生活を支えた媼の思いがけない死去により、困窮する母と子（俊蔭女と仲忠）が、これまでの暮らしを失い、新たな住居を求めねばならなくなるなど、数々の喪失の中、不如意を託つ環境下に置かれることは、物語の展開を左右する重要な厄災と呼び得よう。従って、本指導においては、このエピソードを取り上げるものとする。本格的な中古の物語を扱

う展開期に、文学史の整理をしつつ学ばせるのが効率的と思われるため、例えば、『源氏物語』の前後への配置を想定し、二年の半ば頃での指導を第一案としたい。

「指導観・指導過程の例」

本場面、本エピソードを通じ、親子の深い情愛や、あるいは、いかなる相手に対しても誠実に向き合うことが、不如意な状況下において道を開いた事実に加え、様々な苦難を乗り越える方法として、それらをどのように捉え、また、どのように今後にかかすべきか、学習者自身の問題として考えさせたい。それらを本指導の「核」として、厄災に対応する登場人物の行動、心情を確認することにより、学習者の理解や考えを深めさせる時間とする。

「展開①」では、本場面の前段階として、なぜ母子が家を探す必要があるのかについて、また、本場面における厄災について、現代語訳を配布して確認する。最低限、確認すべき内容は、以下の通りとする。

「父（俊蔭）が官を退き、収入がない家庭で父母が亡くなり、生活の頼りのない娘（俊蔭女）が、太政大臣の子息である若小君と契るも、若小君に再会できず、ひとりで主人公仲忠を出産した。その後、暮らしを支えていた媼も死去し、生活に困窮する母（俊蔭女）を助けるため、仲忠は、遠い山まで食物を求めようにな

るが、どうせなら母を近くに置いて養つてさしあげた
いと、その山に住めそうな場所を求め、結果、熊の住
居であった「うつほ」を探し当てた。」

「展開②」では、本場面の本文の現代語訳を確認後、
古文本文を読ませ、その上で単語・敬語・助動詞・係
り結びといった重要事項を確認する。あらかじめ現代
語訳をしつかりと読ませておくことで、短時間で本場
面の内容の理解が深まり、「展開③」の個人での考察が
効率的に進むことが期待される。

「展開③」では、ワークシートを利用し、母、仲忠、
熊の親子たちの対応をまとめさせ、そのことから何が
読み取れるかを個人で考えさせる。貧窮のうちに暮ら
し家を探さなければならぬという困難な状況におい
ても、仲忠のように誠実に対応し、相手に働きかける
ことよって、相手の助けを得ることができ、道は開
けることもあるということを読み取らせたい。

「展開④」では、個人のまとめをグループで発表させ、
何が読み取れるか、再考察させる。ここでは、個人で
の読解をもとに、更に発展的な議論へとつなげたい。真
摯な対応が、結果、援助を呼び込む事実から、自分も
また他者を助けるよう行動する、といった類の、前向
きな意見へと発展することが期待される。

「まとめ」では、本指導の「核」について、再確認、

問題提起しつつ、指導を閉じる。

《全一時での指導過程例》

- ・ 導入（授業内容・作品内容の確認） Ⅱ 授業の手順
等を確認する。また、作品の成立時代や内容を、
便覧を用いて確認する。（5分）
- ・ 展開①（厄災の確認） Ⅱ 本指導で用いる本文の、
前段階の場面について確認する。確認内容は、前
掲の通り。（5分）

・ 展開②（本文の読解） Ⅱ 敢えて先に本文の現代語
訳を配布し、古文本文と対照しつつ、現代語訳を
確認する。その後、主に「核」の理解に必要な文
法事項や重要古語などについて確認する。（15分程
度）

例・いかでこの山に、さるべきところもがな。

- ・ ここにわが親を据ゑたてまつりて、拾ひ出で
む木の実をも、まつまゐらせ ばや、
- ・ まろが命断ちたまふな。まろは孝の子なり。
- ・ この木のうつほに母を据ゑたてまつりて、芋
一筋を掘り出でもまますまゐらむ。また遠き
道をも、親のためにとまかり歩けば、苦しう
も覚えねど、つれづれと待ちたまふらむも悲
しうはべれば、近く、と思ひたまへて、見は

べりつるなり。

・いづくにか心のあらむ。

・牝熊、牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として、親子のかなしさを知りて、

・展開③（登場人物の対応の理解（個人での活動）

Ⅱ 厄災を契機とした登場人物の対応について、「母（俊蔭女）」・「仲忠」・「熊たち」それぞれの観点からまとめさせる。その上で、それらの事項から何が読み取れるか、個人で考えさせる。適宜、ワークシートを用いる。（10分程度）

例・「母」Ⅱ 荒れ果てた家で仲忠の帰りを待つ。仲忠に養われている。

・「仲忠」Ⅱ 母を養うため、山へ食物と住む家を探しに行く。熊の親子に遭遇した際には、家の事情を説明し、母のために命はとらないよう懇願する。

・「熊たち」Ⅱ 仲忠を見つけた際には襲いかかろうとしたが、仲忠の母を思う真摯な訴えにより、親子の情愛を悟り、「うつほ」を譲る。

・ ↓ 「困難にあっても、仲忠のように、親子の情愛を大切にし、誠実に対応すること、道が開けることがある。」

・展開④（登場人物の対応の理解（グループでの活

動）Ⅱ 「展開③」の成果について、グループで意見交流をさせる。適宜、ワークシートを用いる。

余裕があれば、クラス全体に向け、各グループの代表に発表させると良いだろう。（10分程度）

・ ↓ 「自分もまた困難に際しては、親や年長者を大切にしたり、誠実に対処したり、あるいは、反対の立場から、他者を助けたりするよう努めたい。」

・まとめⅡ 本指導の「核」について再確認する。（5分）

注

1 三田村雅子氏・河添房江氏編『天変地異と源氏物語』（翰林書房 平成25年）、隴谷壽氏「日本古代の地震―平安時代を中心に―」（「むらさき」第五二輯 平成27年12月）、安田政彦氏編『自然災害と疾病』Ⅱ 文学にみる自然災害と疾病」の各御論考（竹林舎 平成29年）等。

2 山名淳氏・矢野智司氏編著『災害と厄災の記憶を伝える 教育学は何かができるのか』（勁草書房 平成29年）

3 本稿では、「厄災」の語について、「天災・人災、

あるいは、それらに準ずる災禍・騒動等」と定義するが、規模や被害の大小・内容の軽重・人為性の有無等に関しては、ひとまず問わず、作中人物に降りかかる不慮の困難や喪失を幅広く捉えた概念として用いることとする。

4

ここに言う「防災・減災教育」とは、「国語科教育」の観点に立脚するゆえ、無論、厄災に対する物理的な備えを主に勧めるものではなく、あくまで作中人物のあり方を読解する営為を通した、一種、精神的な備えの涵養を図るものである。

昨今、環境変動が言われ、全国的に大災害が頻発しており、当地、熊本においても、地震・台風・豪雨等によって甚大な被害が生じた。それらを通し、身を以て痛感したのは、インフラ等、物理的設備の耐久力や対応力以上に、精神的な耐久力や対応力の重要性であった。特に社会的弱者たる子どもほど、災害の現実に対峙することの負荷は大きく、その中でいかに考え、また、いかにあるべきか、何らかのモデル提示が必要と思われる。国策として「国土強靱化」が求められているが、多発する様々な厄災に対し、心的な「強靱化」も同様に求められているのではないか。精神的な耐久力・対応力の涵養を以て次なる厄災に備えを施すことは、教

5

育学ならではのアプローチであると思われる。

次に引用の『大鏡』本文及び頁数は、小学館『新全集』本による。また、【現代語訳】は、上記に提示されているそれを適宜参考にしつつ、私に付した。

文学史の指導場面においては「歴史物語」と呼称される『大鏡』であるが、『大鏡』が歴史的事実を含み込んだ虚構の作品である旨は、既に通説化していると言えよう（『新全集』本「解説」（加藤静子氏）等、多数）。本稿においては、『大鏡』を、いわゆる「物語」作品として、差し当たり、他作品と同列に捉えるものとする。

なお、高校の授業では、「影をば踏まで面をや踏まぬ」の一節や、大極殿の肝試しの一節、あるいは、伊周らとの競射の一節等が多く取り上げられるゆえか、道長の人物像を「剛胆」と概括しがちであるが、先行研究においては、多様な観点から、一方で小心で繊細、情に厚く思慮深い側面があり、強引な政略に偏ることなく、敗者に手を差し伸べる公平さをも兼ね備えた人物である旨の指摘が既になされている（北山茂夫氏『藤原道長』（岩波新書 昭和45年）、山中裕氏『藤原道長』（教育社 昭和63年）、倉本一宏氏『藤原道長の権力と欲望』「御

堂関白記』を読む』(文春新書 平成25年)等)。「剛胆」も、あくまで、「歴史的事実を含み込んだ虚構の作品」との前提の上で理解し、また指導すべきであろう。

6

倉本一宏氏『人物叢書 一条天皇』(吉川弘文館 平成15年)、『三条天皇―心にもあらでうき世にながらへば―』(ミネルヴァ書房 平成22年)、石原のり子氏『大鏡』における兼家と三条天皇―もうひとつの系譜―』(『中古文学』第七十六号 平成17年10月)等。

例えば、倉本氏は、御著書『三条天皇』において、一条の父円融と兼家との、「政治的」に「ぎくしゃくした関係」について言及しておられる。

7

『大鏡』のいう、兼家が、帝一条ではなく「春宮たる三条のもとに駆け付け」た「地震」について、三条の立太子が①寛和二年(九八六年)七月十六日で、即位(受禪)が寛弘八年(一〇一一年)六月十三日、兼家の薨去が②正暦元年(九九〇年)七月二日であるから、その発生は、①②間中ということになる。『日本紀略』、『扶桑略記』に寛和二年十一月十日、『小右記』に永延元年(九八七年)四月十四日、『百鍊抄』に永延二年(九八八年)五月十日、『小右記』に永延三年(九八九年)七月二十一日な

8

ど、いずれも都付近の地震とおぼしい記事がそれぞれに見られるが、これらのいずれかであろうか。あるいは、それらをもとにした「虚構」であろうか。

例えば、『源氏物語』野分巻においては、台風襲来に際し、父光源氏、祖母大宮を優先的に見舞う夕霧の姿が描かれるが、この一節を取り上げ、同様に「厄災に際し、一族の年長者を気遣おうとする人間の姿」について考えさせる授業も構想されよう。当該場面を引用しておく。なお、引用の『源氏』本文及び頁数は、岩波書店『新大系』本による。

野分、例の年よりもおどろくしく、空の色
変はりて吹き出づ。…(中略・夕霧は光源氏
の居所、六条院を見舞う。)…(光源氏の言)
「中将(夕霧)はいづこよりものしつるぞ」、(夕
霧の言)「三条の宮に侍つるを、風いたく吹き
ぬべしと、人々の申つれば、おぼつかなさ(こ
こ六条院に)まいり侍つる。かしこ(三条の宮)
にはまして心ぼそく、(大宮は)風のをとをも、
いまはかへりて若き子のやうにをぢ給めれば、
心ぐるしさに、まかで侍なむ」と申給へば、「げ
に、はやまうで給ひね。老いもていきて、又若
うなること、世にあるまじき事なれど、げに
さのみこそあれ」などあはれがりきこえ給て、

「かくさはがしげにはべめるを、この朝臣さぶらへばと、思たまへ譲りてなむ」と、(三条の宮の大宮に)御消息聞こえ給ふ。道すがらいりもみする風なれど、(夕霧は)うるはしくものし給ふ君にて、三条の宮と六条院とにまいり御覽ぜられ給はぬ日なし。内の御物忌などにあはせず籠り給べき日よりほかは、いそがしき公事、節会などの、暇いるべくことしげきにあはせても、まづこの院(六条院)にまいり、宮(三条の宮)よりぞ(宮中に)出で給ひければ、まして今日、かゝる空のけしきにより、風のさきにあくがれありき給ふもあはれに見ゆ。宮(大宮)、いとうれしう頼もしと待ちうけ給て、「こゝらの齡に、まだかくさはがしき野分にこそあはざりつれ」と、たゞわなゝきにわなゝき給。大きな木の枝などの折るゝおともいとうたてあり、おとゞの瓦さへ残るまじく吹き散らすに、「かくてものし給へる事」と、かつはのたまふ。(野分巻三六〇頁)

【現代語訳】

台風が、いつもの年よりもひどく、空の色も変わって吹き始める。…(中略・夕霧は光源氏の居所、六条院を見舞う。)…光源氏は「中

将はどこからここへやってきたのか」と尋ね、夕霧は「三条の宮におりましたが、風がひどく吹くだろうと、人々が申しますので、こちらのことが案じられてここ六条院に参上しました。あちら三条の宮ではまして心細く、祖母の大宮は風の音をも、今はかえって若い子どものように怖がりなさるので、心苦しくて、こちらは退出申します」と申し上げなされると、光源氏は「本当に、早くお見舞いに参上なされよ。歳を取っていつて、また若返ることは、世間にあるはずもないことだが、本当に皆そうしたものようだ」など気の毒がり申し上げなざつて、「このような大変な暴風のようにですが、この夕霧がおそばにお仕えるならと、お世話に任せることといたしました」と、三条の宮の大宮にお伝え申し上げなされる。道中吹き荒れる風であるが、夕霧は誠実でいらつしやる方で、三条の宮と六条院とに参上して大宮と光源氏にお目にかかりなさらぬ日はない。宮中の御物忌などでやむを得ず籠りなさらねばならない日以外は、忙しい政務や、節会などの、時間を取られ多忙な状況下にあつても、まずこの六条院に参上し、その後三条の宮へ

行つてそこから宮中に出仕なさつたので、ま
して今日の、このような空模様のために、風
の先頭に立つたかのようにあちこちお見舞いに
歩き回りなさるのもけなげに見える。大宮は、
夕霧の見舞いがたいそう嬉しく頼もしいこと
と待ち受けなさつて、「こんな歳でも、まだこ
れほど激しい台風に遭つたことがない」と、た
だ震えに震えておられる。大きな木の枝など
が折れる音もたいそうおそろしくて、建物の
瓦までも残りそうもなく吹き散らすので、「こ
うしてよく来て下さつたことよ」と、一方
はおつしやる。

9 引用の『竹取物語』本文及び頁数は、小学館『新
全集』本による。【現代語訳】については、注5と
同様である。

10 引用の『うつほ物語』本文及び頁数は、小学館『新
全集』本による。【現代語訳】については、注5と
同様である。

※本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C）・課題番号：
18K02637）による成果の一部である。

【付記①】

共著者、佐々優香氏は本学大学院生、山本沙織氏は
本学（古代文学研究室）卒業生である。両氏については、
成稿のため、忙中にも関わらず、極めて誠実にご尽力
下さつた。記して感謝申し上げる。ゆえあつてか、今夏、
思いがけず突発性の耳の病を患い、頗る低調な聴覚の
下での作業は、心身共に、殊の外、辛いものであつた
が、両氏は、折に触れ、かかる小生を気遣つて下さつた。
併せ、感謝申し上げます。大切と思う何かを失う痛みを、
厳に胸に刻んでおきたい。わけても、本稿のごときテー
マに携わるに際し、そのことは決して忘れてはなるま
いと思う。

また、一連の作業を通じ、本稿のテーマが一般的な
国語科教育の範疇を越える、いわば、全人的な教育へ
とその射程を延ばしているゆえでもあるが、指導者
サイドの指導の仕方について、また、学習者サイドの
指導の受け方について、就中、期待することや信頼す
ること、あるいは、約束を守ることや筋を通すこと等、
指導者・学習者、相互の人間関係のあり方と関わつて、
それらがいかにあるべきか、改めて深く考えさせられ
たことも付記しておきたい。（中井）

「付記② ―惜別の辞―」

本年度末を以て熊本県立大学を辞する。少なくともあと数年は本学で、と思つていただけに、予想外の急展開であつたが、いかにもさるべき流れがあつた。

在任の八年間、学務や自身の研究はもとより、他に特に注力したのは、学生の研究レベルの向上と希望進路の実現であつた。高い壁を越えてこそ開かれる境地や、人一倍の努力を経てこそ得られる価値があることを知つてほしい、との一心で、学生達、就中、ゼミ生達には様々なハードワークを課してきた。それらが具体的な形で報われるよう努めてきたつもりではあるが、改めて、私の思いが、彼ら彼女らに確と届いていることを、また、彼ら彼女らが、さような境地や価値を確と体感していることを、願わずにはいられない。私が去つた後の本学がどのように変わるのか知る由もないが、今は、私の後任者が、私同様、あるいは、私以上に、それらに注力して下さる方であることを、これも願わずにはいられない。

心残りはある。様々な思いがないまぜになつた複雑な感情が込み上げるが、今は全てを飲み込み、次なる目標への糧としたい。恩師との約束を果たすためにも、である。

本学で出会つた全ての方々に感謝申し上げます。再会

の日を楽しみにしている。(中井)